

令和 5 年 6 月 27 日現在

機関番号：34203

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K12603

研究課題名(和文)すこやかな最終段階を迎えるための意思決定の推進とソーシャルキャピタルの醸成

研究課題名(英文)Promoting decision-making and fostering social capital for a healthy final stage

研究代表者

安孫子 尚子 (Abiko, Shoko)

聖泉大学・看護学部・教授

研究者番号：20635205

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、高齢者が健やかな老年期を過ごすために必要な人生の最終段階の医療とケアの意思決定の推進を図るとともに、その意思決定を支えるために地域におけるソーシャルキャピタルの醸成を目指して、元気高齢者を対象とした保健師が行う健康教育プログラムの項目を検討した。元気高齢者を対象に人生の最終段階の医療とケアに関する意思決定に関連する項目についての横断研究で実態を把握し、地域で元気高齢者の健康づくり支援を行う保健師に対して、高齢者が人生の最終段階の医療とケアの意思決定を促進するための取り組みについてグループフォーカスインタビューを実施し、質的に分析し健康教育プログラム項目とその内容について検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の結果は5つの国際学会と3つの国内学会で発表、1論文を発表(現在投稿中1本)した。学会発表や論文での公表は、高齢者に最終段階の医療やケアの意思決定に関する健康教育内容を検討するための一助となった。この結果の普及と、健康教育を実施することで、高齢者が意思決定することやそれを支える地域づくりの発展が今後期待できる。さらに、健康教育プログラムは、在宅での看取りを支える専門職においても有用に活用できるものと考えている。高齢者の最終段階の医療とケアの意思決定を支え、終末期の過ごし方を再確認できる。これらにより、高齢期のすこやかな死を迎えるための健康づくり支援、保健師の質的向上に貢献できる。

研究成果の概要(英文)：This study examined items in a health education program conducted by public health nurses targeting the healthy elderly with the aim of promoting decision-making on medical care and care for the final stage of life necessary for the elderly to live a healthy old age and fostering social capital in the community to support such decision-making. We conducted a cross-sectional study on items related to decision making about medical care and care in the last stage of life among the healthy elderly to grasp the actual situation, and conducted a Group focus interviews were conducted and qualitatively analyzed to examine health education program items and their contents.

研究分野：公衆衛生看護学

キーワード：元気高齢者 人生の最終段階 意思決定 保健師 健康教育プログラム

## 1. 研究開始当初の背景

### <社会的背景>

厚生労働省の「人生の最終段階における医療の決定プロセスに関するガイドライン(2005)」において、医療とケア方針の決定は、本人の意思、または家族が本人の意思推定に従い、本人、家族、医師・ケアチームが話し合うことを推進している<sup>1)</sup>。ガイドラインを受けて、日本医師会の生命倫理想談会では、終末期医療の決定は、患者の意思を基本とすることを報告し<sup>2)</sup>、日本老年医学会においても、すべての人は死を迎える際に、個々の価値観や思想・信条・信仰を尊重した最善の医療・ケアを受ける権利を有するという立場表明を行った<sup>3)</sup>。これらは、高齢者の人生の最終段階において、本人の意思決定が優先されることが最も重要であると説明しているが、ガイドラインの策定から11年が経過した現在、高齢者の最終段階の意思決定は定着しているとは言えない。その理由には、高齢者本人が最終段階での意思決定を行う必要性の理解不足と、日本人の死に対する文化的な背景が挙げられる。

### <学術的背景>

高齢者の最終段階の意思表示の方法には、遺言、リビングウィル、事前指示書、エンディングノート、ACP (advance care planning) などがある<sup>4)</sup>。しかし、杉野ら<sup>5)</sup>や経済産業省の報告<sup>6)</sup>では、事前指示書やエンディングノートは知名度が低く、実際の作成は少ないことが上げられている。これらの報告は、高齢者は意思表示をすることが少ないこと<sup>7)</sup>や、終末期に関する希望があったとしても他者に伝えられていないこと<sup>8)</sup>、脳梗塞による後遺症や認知症の発症などで判断能力の低下から意思表示が困難になりやすいこと<sup>9)</sup>が考えられる。

高齢者の意思表示の困難さは、延命治療の決定において、半数以上が医師や家族に任せ、本人と家族が話し合う割合の低さ<sup>10)</sup>をもたらす。また、介護施設での終末期ケアの決定では、高齢者の意思決定が1割に満たず、主に家族や親族が行っている実態につながっている<sup>11)</sup>。このような状況は、高齢者の望む人生の最終段階を迎えているとは言い難く、高齢者に代わって人工呼吸器や人工栄養、点滴などの生命に関わる重要な決断を行う家族や親戚、医師や医療従事者の精神的な負担は大きい<sup>12)</sup>。

高齢者の人生の最終段階の意思決定を推進するためには自立期にある高齢者の意思決定支援が喫緊の課題である。終末期ケアに関して、老人クラブの高齢者は延命治療を望まず、自宅療養を希望し<sup>13)</sup>、現病歴のある外来高齢患者は寿命に任せた医療と自宅での療養を希望している<sup>14)</sup>。高齢者の希望する人生の最終段階を自宅で迎える選択を実現するためには、最終段階の医療やケアが適切に行われると同時に、自宅での療養生活を支える地域でのソーシャルキャピタルの醸成が必要である。

保健師は、高齢者に対して健康診査、健康教育など、健康づくり支援を行っているが、最終段階の意思決定への教育は行っていない。今後、保健師が元気高齢者に対し教育プログラムを用いて、高齢者が人生の最終段階について理解し意思決定を行うことと、最終段階を自宅で迎えるためのソーシャルキャピタルを醸成する教育を行うことは、高齢者が今までの人生を受け入れて肯定的な統合を目指すという発達課題を達成し、すこやかな最終段階を迎えることができ、日本人の死に対する文化的な背景が変化すると推察される。

### 参考文献

- 1) 厚生労働省 (2005) .人生の最終段階における医療の決定プロセスに関するガイドライン, <http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000079283.html>
- 2) 日本医師会第 3 次生命倫理想談会 (2014), 第 24・25 年度生命理想談会答申 今日の医療をめぐる生命倫理-特に終末期医療と遺伝子診断・治療について-, [http://dl.med.or.jp/dl-med/teireikaiken/20140402\\_3.pdf](http://dl.med.or.jp/dl-med/teireikaiken/20140402_3.pdf)
- 3) 日本老年医学会(2012), 高齢者の終末期の医療およびケアに関する日本老年医学会の立場表明 2012, <https://www.jpn-geriat-soc.or.jp/proposal/tachiba.html>
- 4) 成木迅(2016), 認知症の人の医療選択と意思決定支援, クリエイツモがわ, 京都.
- 5) 杉野美和, 奥山真由美, 道繁祐紀, 他(2015), 高齢者への事前指示書の普及に関する文献的考察, 山陽論叢, 22, 21-27.
- 6) 経済産業省(2012), 平成 23 年度経済産業省委託事業 安心と信頼のある「ライフエンディング・ステージ」の創出に向けた調査研究事業報告書, [http://www.meti.go.jp/meti\\_lib/report/2012fy/E002295.pdf](http://www.meti.go.jp/meti_lib/report/2012fy/E002295.pdf)
- 7) 高橋子, 布施淳子(2012), 訪問看護師による在宅療養高齢者の終末期医療に対する意思把握の方法, 日本看護学会誌, 35(1), 99-105.
- 8) 木内千晶, 吉田千鶴子(2004), 高齢者の希望する終末期の迎え方, 岩手県立大学看護学部紀要, 6, 77-82.
- 9) 青木頼子(2014), 意思困難な高齢者を支える家族の代理意思決定に関する文献レビュー, 富山大学看護学会誌, 14(2), 131-144.
- 10) 松井美帆, 森山美知子(2004), 終末期ケアに関する啓発活動へ的高齢者の関心と規定要因, 生命倫理, 14(1), 65-74.

- 11) みずほ情報総研(2014),平成 25 年度老人保健事業推進費等補助金老人保健増進等事業「長期療養高齢者の看取りの実態に関する横断調査事業」報告書.
- 12) 武ユカリ(2014),決断をせまられた患者・家族のケア意思決定が難しい要因とその時にナースにできること,看護学雑誌,69(4),360-365.
- 13) 吉田千鶴子(2010),高齢者が考えるエンドオブライフ期の迎え方-エンドオブライフ期への支援システム構築をめざして-,豊橋創造大学紀要,14,95-110.
- 14) 松下哲,稲松孝思,橋本肇,他(1999) ¥. 終末期のケアに関する外来高齢者患者の意識調査,日本老年医学会雑誌,36(1),45-51

## 2. 研究の目的

保健師が行う元気高齢者への「老年期における最終段階の意思決定とソーシャルキャピタルの醸成に関する教育プログラム」の検討のために、次の手順で研究を進める。

- 1) 元気高齢者の人生の最終段階の医療とケアの意思決定に関連する先行研究、専門書、報告書などを対象に、文献を収集し、その内容を精査することによって研究動向や今後の課題について明らかにしたのちに質問紙の作成を行う。
- 2) 1)の結果を用いて老人クラブの高齢者を対象に質問紙調査を行い、最終段階の意思決定の現状とその背景の実態を明らかにする。
- 3) 2)の結果をもとに、滋賀県内に勤務する市町保健師を対象に、フォーカスグループインタビューを実施し、高齢者の人生の最終段階の意思決定に関する教育の実施状況および時期や内容についての考えを明らかにする。
- 4) 1) 2) 3)の結果から教育プログラムの項目を検討する。

## 3. 研究の方法

- 1) 2017 年度は、元気高齢者の人生の最終段階の医療とケアの意思決定に関連する先行研究、専門書、報告書などを参考にして文献検討を行い、質問紙作成を行った。
- 2) 2018 年度は、2017 年度に作成した質問紙による、元気高齢者の質問紙調査を実施した。対象は滋賀県の老人クラブ連合会に登録している 1 市 1 町の 25 単位老人クラブのうち、研究協力同意を得られたクラブ員とした。
- 3) 2021 年度は地域で元気高齢者の健康づくり支援を行う市町保健師に対して、高齢者が人生の最終段階の医療とケアの意思決定を促進するための取り組みについてグループフォーカスインタビューを実施し、質的に分析したのちに、健康教育内容項目の検討を行った。

## 4. 研究成果

- 1) 2017 年度は、元気高齢者の人生の最終段階の医療とケアの意思決定に関連する先行研究、専門書、報告書などを参考にした質問紙を作成した。質問項目は、高齢者の属性（年齢、性別、家族構成、既往歴）、高齢者の経験（介護、看取り、最終段階の意思決定するための教育）、高齢者の意思決定（知識、態度、行動）、高齢者の知識（最終段階で行われる医療項目、最終段階で起こる身体状況の変化項目）、人生の最終段階で高齢者が大切にしたいもの、高齢者のヘルスリテラシー、高齢者のソーシャルキャピタル、高齢者の健康関連項目（SF-8）、高齢者の日常生活活動能力であった。
- 2) 2018 年度の質問紙調査では、滋賀県の老人クラブ連合会に登録している 1 市 1 町の 25 単位老人クラブのうち、研究協力同意を得られた 15 クラブの元気高齢者 1239 名に実施した。返信は 831 名（回収率 67.07%）であった。元気高齢者の人生の最終段階の医療とケアの意思決定には、医療知識 10 項目のうち 5 項目、死の直前の症状 6 項目のうち 4 項目以上の知識があることが関連し教育プログラムに必要な項目であった。2019 年度にはさらに分析を進めた。高齢者の健康に関する医療情報についてヘルスリテラシー尺度と医療知識、死の直前症状項目で分析した。分析の結果、人生の最終段階に対する教育機会のないもの、意思決定の中でも伝達方法について知らないものはヘルスリテラシー尺度が低かったことが明らかとなった。
- 3) 2021 年度のグループフォーカスインタビュー調査は、市町の保健師 6 名の 1 グループを対象にして実施した。質的記述的に分析した結果、健康教育では、最終段階で高齢者が大切にしたいものを中心にしながら、医療的に行われる知識は具体的なイメージができるような視覚的教材で説明を行うこと、高齢者が意思決定を表現するためには選択肢の提示から選ぶことができる支援が必要であることが明らかとなった。
- 4) 2017 年度の先行研究に対する文献検討に関する論文投稿 1 本、2018 年度の研究 1, 2 の調査結果を国際学会 2 題（ICN：シンガポール、6thWANS:大阪）で発表を行った。2022 年は、さらに分析を進め、国際学会（25thEAFONS）での発表、学会誌への投稿を行った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 安孫子尚子	4. 巻 9
2. 論文標題 高齢者の人生の最終段階における医療とケアの意思決定に関する文献レビュー	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 聖泉看護学研究	6. 最初と最後の頁 43-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 0件/うち国際学会 5件）

1. 発表者名 安孫子尚子, 巽あさみ
2. 発表標題 Factors actors associated with end-of-life decision-making among healthy Japanese Elderly
3. 学会等名 25thEAFONS (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 安孫子尚子
2. 発表標題 元気高齢者の人生の最終段階における意思決定とソーシャルキャピタルの関連
3. 学会等名 日本公衆衛生学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 安孫子尚子, 巽あさみ
2. 発表標題 Relationship between Know- ledge, Attitudes, and Practices (KAP) in End-of-Life Decision- Making and Factors Considered Important among Healthy Japanese Elderly
3. 学会等名 6th Global Network of Public Health Nursing (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 安孫子尚子, 巽あさみ
2. 発表標題 元気高齢者の人生の最終段階における医療・ケアの意思決定と医療関連知識との関連
3. 学会等名 日本公衆衛生看護学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Shoko Abiko, Kazuko Mitoku, Eriko Arakane
2. 発表標題 The relationship between medical knowledge and decision-making during the final stages of life of healthy older adults
3. 学会等名 International Council of Nurses Congress 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Shoko Abiko, Kazuko Mitoku, Eriko Arakane
2. 発表標題 Decision making in the final stage of life for healthy older adults
3. 学会等名 The 6thWANS (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 安孫子尚子
2. 発表標題 人生の最終段階における医療とケアに関する文献レビュー～高齢者の意思決定について～
3. 学会等名 日本看護研究学会第33回近畿・北陸地方会学術集会, 滋賀
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 安孫子尚子
2. 発表標題 The relationship between medical knowledge and decision-making during the final stages of life healthy older adults
3. 学会等名 2019年国際看護師協会 (ICN) 大会 (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	三徳 和子  (Mitoku Kazuko)  (60351954)	兵庫大学・看護学部・教授   (34524)	
研究分担者	巽 あさみ  (Tatsumi Asami)  (90298513)	人間環境大学・看護学部・教授   (33936)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------